38

麻沸湯論條評

――麻酔科医から見た華岡流全身麻酔法についての新しい資料――

土手健太郎[1)]，牧野　　洋[2)]，菊地　博達[3)]

[1)] 愛媛大学附属病院集中治療部，[2)] 浜松医科大学医学部麻酔・蘇生学講座，[3)] 我孫子東邦病院

1804年，華岡青洲は麻沸散を用いた全身麻酔下に乳癌切除術を行った．しかし，青洲は，自身の著書を残さなかったため，彼の全身麻酔法の詳細は不明である．現在，華岡流の麻酔法について知ることができるのは，青洲の弟子の鎌田玄台と本間玄調が彼らの麻酔法について書き残しているからである．ただし，詳細な記載をしているのは玄台の麻沸湯論のみで，不明な点も多い．今回，私たちは，難波経直が著した外科小補のなかに華岡流の全身麻酔法についての解説である麻沸湯論條評を再発見した．外科小補に関しては中山沃の解説が詳しいが，今回は，麻酔科医から見た麻沸湯論條評と難波経直について報告する．

【方法】難波経直と彼が著した麻沸湯論條評について，内容を検討するとともに，各種文献を検索し比較検討を加えた．

【結果】難波経直は1818年，備前金川に，外科医，産科医として有名な難波抱節の長男として生まれた．成人後，父親の抱節と同様に春林軒に学び，その後，京，中国，九州の名医に学んだ後故郷に帰り開業した．この間，鎌田玄台の医療に感銘を受け，玄台の死後，1857（安政4）年に，外科起廃に自件例を加えて解説した続外科起廃ともいわれる外科小補を著した．この最初の章が全身麻酔の教科書ともいえる麻沸湯論條評で，経直の麻沸湯を用いた全身麻酔法について述べている．以下にその内容を述べる．麻沸という言葉は，後漢書の華陀伝に初めてみられ，傷寒論の大黄黄連瀉心湯の條に見られる．お湯が沸騰した時の泡沫が麻子の様という意味である．そのため，麻沸湯論という言いかたは適当ではなく，用麻薬論の四字に改作するほうがよい．麻沸湯は酒か水で薬を煎じて飲ませる．五十年間毎年数十人，華岡流全身麻酔法は奏功している．上手に用いれば百にひとつの失敗もない．薬の作り方としては，成分である植物を細かく切り，三升の水を加え，とろ火で夏は2時間，冬は3時間一升に煮詰めて用いる．強壮な人に使用する時は，まず3日間飲食を調節し健胃薬を投与し，朝食は絶食とし薬を投与する．投与後，早い者は1時間，普通2時間で手術可能となる．早く効果の出た者は早く覚醒し，遅く出た者の覚醒は遅い．ただ，この薬を投与しても麻酔状態にならない者が，1000人に1～2人いる．これらは病苦に耐え，我慢強い人である．嘉永元（1848）年，鳥取の婦人の乳癌切除にこの薬の3倍量投与したが酔迷になるものの，術中のことを覚えていた．青洲先生の患者でも同様の事があった．麻酔からの覚醒に関しては，玄台先生の論ずるところと同じで，茶湯に食塩を少量加えて投与する．詳しくは瘡瘍新書にある．医師というものは肉を割って，長く治らない病気を治すもので，それにはこの薬は欠くべからざるものである．ただこの事を世の中に広く伝え，多くを救いたいと思う．また，初心者がみだりにこの薬を用いると禍が浅くない．私の論ずるところをわきまえて，この処方に詳しくなり，熟達してほしい．何萬回行っても失敗なく，患者の命を損なったと誹られないよう願っている．どうして慎重にならないことがあるだろうか？

【結論】華岡流の全身麻酔法についての，鎌田玄台の麻沸湯論，本間玄調の瘍科秘録に次ぐ資料として，難波経直の著した麻沸湯論條評を再発見した．経直は，華岡・難波流の全身麻酔の教科書ともいえる麻沸湯論條評なかで，麻沸湯の作り方，強壮な人への使用法，術中覚醒の事，経直流の全身麻酔法について述べている．使用時の心構えに関しては，現在にも通じるものが十分ある．